

1. 教員および授業の概要

①教員名： 深串 徹 (Toru Fukakushi)

②担当科目

博士前期課程：北東アジア超域研究総論

北東アジア専門講義 10 (中国・台湾研究)

北東アジア研究指導 I～IV

③教員のプロフィール

- ・ 青山学院大学大学院国際政治経済学研究科博士後期課程修了
- ・ 博士 (国際政治学)
- ・ 2006年4月 - 2008年3月 国立国会図書館調査及び立法考査局国会レファレンス課非常勤職員
- ・ 2013年9月 - 2014年3月 専修大学法学部非常勤講師
- ・ 2014年8月 - 2016年3月 国立国会図書館利用者サービス部人文課古典籍資料室非常勤職員
- ・ 2015年10月 - 2017年3月 公益財団法人日本国際問題研究所若手客員研究員
- ・ 2016年4月 - 2020年3月 全国高等学校長協会入試点訳事業部職員
- ・ 2017年4月 - 2018年3月 東京女子大学現代教養学部非常勤講師
- ・ 2019年4月 - 2020年3月 二松学舎大学国際政治経済学部非常勤講師
- ・ 2020年4月 - 2022年3月 愛知大学国際中国学研究センター研究員

④所属学会

- ・ 日本国際政治学会
- ・ アジア政経学会
- ・ 日本台湾学会
- ・ 台湾史研究会

⑤研究領域や関心をもっているテーマ

- ・ 台湾地域研究
- ・ 東アジア国際関係史

⑥研究指導方針

教員の専門は台湾地域研究ですが、中国語圏の政治や社会について何らかの問題意識を持っている院生であれば、どのようなディシプリンを背景としているかを問わず、歓迎

します。研究テーマの選択については、基本的に院生の意思を尊重しますが、学術的・社会的な意義を有しており、なおかつ実行可能なものであることが前提となります。そのため、テーマの決定に至るまでの間は、綿密に討論を行います。また、資料収集や学会・研究会活動への参加のため、積極的に外に出ていくことを推奨します。

⑦指導可能な研究テーマ（あるいは過去（現在）に指導した研究テーマ）

- ・台湾政治史
- ・中台関係
- ・日台関係
- ・中国語圏におけるナショナリズム
- ・中国語圏における戦争と社会
- ・中国語圏における民主化運動
- ・歴史認識問題

2. 研究業績リスト

①著書

- (1) (共著) 渋谷淳一・本田量久編『21世紀国際社会を考える：多層的な世界を読み解く 38章』（旬報社、2017年）
- (2) (単著)『戦後台湾における対日関係の公的記憶：1945-1970s』（国際書院、2019年）
- (3) (共訳) Kathy Charmaz 著、岡部大祐監訳『グラウンデッド・セオリーの構築』（ナカニシヤ出版、2020年）

②論文

- (1) 「戦後吉田茂的中国外交策略」『兩岸三地歴史学研究生研究会論文選集』、2010年7月
- (2) 「戦後初期における台湾の政治社会と在台日本人：蒋介石の対日「以德報怨」方針の受容をめぐって」『日本台湾学会報』第14号、2012年6月
- (3) 「対日講和会議参加問題と中華民国政府の対応：1950～1952年」『中国研究月報』第67巻第6号、2013年6月
- (4) 「戦後台湾における「対日関係史」叙述と「歴史問題」：1945～1959年」, *Aoyama Journal of International Studies*, vol.1, 2014
- (5) 「『中国の特色ある新型シンクタンク』の建設と中国の対外政策」『平成28年度外務省外交・安全保障調査研究事業 国際秩序動揺期における米中の動勢と米中関係 中国の国内情勢と対外政策』、2016年
- (6) 中華民国の公定歴史認識と政治外交：一九五〇-一九七五年」『国際政治』第187号、2017年3月

- (7) 「雷震眼中的戦後日本 (1950s-1970s)」『台湾史學雑誌』第 29 号、2020 年 12 月
(8) 「台湾における戦争と視覚障害者 (1937~1991 年)」『日本台湾学会報』第 24 号、
2022 年 6 月

3. 学生に対するメッセージ

研究論文の中には、あなたが大量に仕入れた知識やデータの、ほんの一部しか反映させることができません。先行研究を読み込んだり、外国語を習得したり、文書館に通ったり、研究会に参加したりするために費やしてきた多くの時間が、必ずしもそのまま論文の生産につながるとは限らないのです。そのため、研究とは、非常にコスト・パフォーマンスの低い営為だと言うこともできます。しかし、一本の研究論文が生産されるまでに、著者がどれだけの研鑽をつんできたかは、見る人が見ればすぐに分かるものです。それに、論文を執筆している過程で、過去に読んだあの文章、同級生が発したあの一言、調査地でのあの経験...などが、「ここでつながるじゃないか!」と気づいた時の興奮は、なにものにも代えがたいものがありますが、そうした気づきもまた、濃密な蓄積を経て、はじめて得られるようになるものです。研究者を目指すのであれ、途中で違う道に進むのであれ、このような世界を経験しておくことは、その後の人生にきっと役に立つことと思います。